

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ニギス

学名 *Glossanodon semifasciatus*

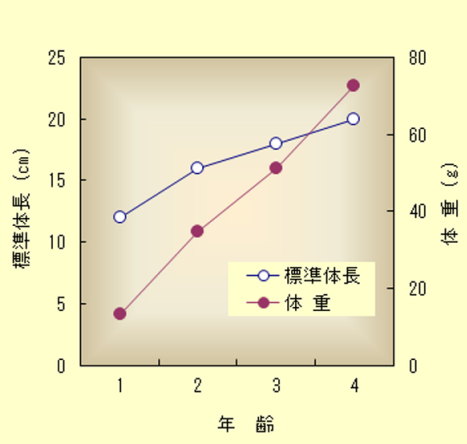
系群名 日本海系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 不明
成熟開始年齢： 1.5歳
産卵期・産卵場： 周年(ピークは春季と秋季)、産卵場は不明
索餌期・索餌場： 周年、水深100～200m
食性： 浮遊性小型甲殻類
捕食者： ヒラメ、ソウハチ、ムシガレイ、アカムツ等

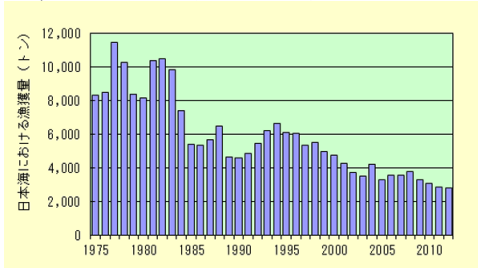


漁業の特徴

本種の主な漁場は青森県～島根県の日本海沿岸と、愛知県および高知県の太平洋沿岸に形成され、総漁獲量の7～8割が日本海沿岸で水揚げされる。日本海の本州沖合において、本種は水深100～200mに分布しており、主として沖合底びき網(沖底)と小型底びき網(小底)で漁獲される。日本海では、新潟、石川、兵庫、島根の4県での水揚げが多く、これら4県で日本海側総漁獲量の約9割を占める。

漁獲の動向

日本海における漁獲量は、1975～1983年は10,000トン前後で推移したが、1984年から大きく減少し1990年には約4,600トンとなった。1991年以降は増加に転じ、1994年に6,600トンに達したが、その後再び減少した。2002年以降は3,000トン以上で推移していたが、2009年から減少が続き2012年は過去最低の2,828トンとなった。



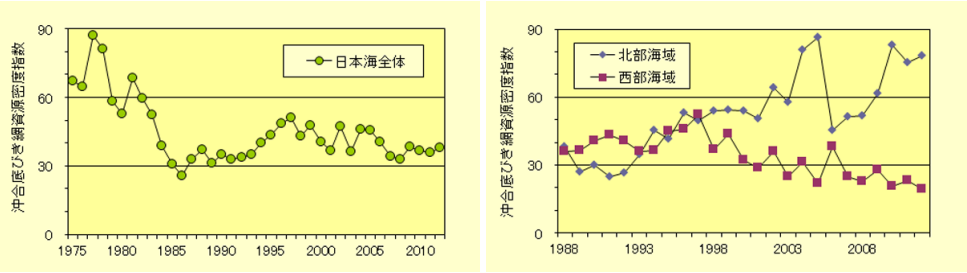
資源評価法

日本海全体における沖底(1そうびき)による資源密度指数を資源評価の指標値とした。また、近年、本系群の資源密度指数は海域によって異なる傾向があり、日本海を北部海域(加賀沖以北)と西部海域(若狭沖以西)に分けた場合の沖底(1そうびき)の資源密度指数も考慮した。さらに、島根県の小底の漁獲量は西部海域の沖底漁獲量に匹敵し、西部海域の資源の状態を反映していると考えられることから参考に用いた。

資源状態

資源密度指数は1977年をピークに1986年まで減少し、1987～1997年に増加した。その後、増減を繰り返しながら推移した。近年5年間は横ばいで推移しているが、長期的にみると減少傾向にあった。また、日本海北部と西部の資源密度指数を比較すると、1997年以降における変動は大きく異なった。北部は増加し高い値を示す一方、西部では減少が続いた。また、島根県の小底のCPUEは数年単位で大きく変動したが、経年的には緩やかに減少した。





管理方策

近年の沖底の資源密度指数は経年的に大きな増減なく推移していることから、2012年の資源水準は中位、動向は横ばいと判断した。しかし、長期的にみると、資源密度指数は減少傾向にあった。西部の資源密度指数は低位水準の範囲にあった。一方、北部では高位水準を維持していた。以上より、漁獲圧を現状よりもやや抑えることにより、現在の資源水準(中位)以上を維持することが必要であると判断した。ABC算定規則2-1)に基づいてABClimit及びABCtargetを算定した。

	2014年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	24百トン	$0.8 \cdot \text{Cave}3\text{-yr} \cdot 1.01$	—	—
ABCtarget	19百トン	$0.8 \cdot 0.8 \cdot \text{Cave}3\text{-yr} \cdot 1.01$	—	—

- 平成24年度にABC算定規則が改正され、ABCは $\text{ABClimit} = \delta_1 \cdot \text{Ct} \cdot \gamma_1$ 、 $\text{ABCtarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$ で計算
- 資源水準が中位であるため係数 δ_1 は標準値の0.8、Ctは2010～2012年の平均漁獲量(Cave 3-yr)である2,914トン
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、bとlは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)
- 100トン未満を四捨五入

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は横ばいであるが、長期的には減少傾向
- 北部海域と西部海域で資源状態の差が大きい

管理方策のまとめ

- 現在の資源水準以上を維持するため漁獲圧を現状よりもやや抑える

執筆者: 松倉隆一・養松郁子

資源評価は毎年更新されます。